

2022. 3. 20. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書 10章 17～31 節
『後の者が先になる』

前々回学びました 9;14-29 の後、30-32 で死と復活の再予告がなされ、33-37 の「いちばん偉い者」、38-41 の「逆らわない者は味方」、42-50 の「罪への誘惑」、10;1-12 の「離縁について教える」13-16 の「子どもを祝福する」と本日の箇所は初代教会内部で取り沙汰されていた具体的な課題です。特に本日の 17-31 はマタイ 19;16-30、ルカ 18;18-30 にも取り上げられた「金持ちの男」という小標題でもわかる通り、信仰と金品への欲に関する課題でした。

当時の初代教会(初期キリスト教共同体)は共産社会でした。「持つ」者の集まりではなく、「持たない」者の集まりであったわけです。初代教会に集った人々は「貧しい人」がほとんどでしたから無理からぬことなのです。彼ら・彼女らは一切の私的財産を持たず、一つのパン・一杯のブドウ酒をみんなで分かち合って生活していました。そして、そこで同じ貧しい人々―病者・障がいを持つ人・高齢者・子ども・女性・外国人・職業的被差別者等―の介護や教育等にあたっておりました。これが初代教会の日常であり、この中から「福音」という課題が見出されてゆきました。

ところが、初代教会の働きが認知され拡がり始めるにつれ「持つ」人たちが入って来始めたのです。この人たちは初代教会の内に入ってさえなお「持つ」者でありたかったのです。ここで初代教会の持つ共産制度は危機を迎えたのです。

マルコは「金持ちの男」、マタイは「金持ちの青年」、ルカは「金持ちの議員」と記します。実はこれらの人物は福音書の中の登場人物で唯一イエスの招きを拒んだ人物なのです。

17 節で「イエスが旅に出ようとされると」と書き始められます。直訳すると「そして彼が道に出て行くと」となります。道というのは道路のことではなく「受難の道」ということです。

21 節でイエスはこの熱心な男を「慈しんで」とマルコは記します。これは「愛して」という意味です。愛するということは「あなたの全てを受け入れる。しかし、

同時にわたしはあなたに厳しく求める」ということです。

イエスは「あなたに欠けているものが一つある」と問い直され、「それから、わたしに従いなさい」と語られます。イエスと出会い従うということは、受難の道の途上で出会い、その道に従うということなのです。それは自己目的追求という所作を捨て、自らの存在の根拠を神に求め、神を中心に生き直すことへの促しでした。しかし、彼は「悲しみながら立ち去った」といいます。「悲しむ」というのは「喜びを拒否する」という意味です。彼はイエスの勧めに喜びを見出せなかったのです。

どれほど深い信仰、熱心な奉仕、正しい生活でも、そこに喜びがなければおかしいと考えるべきでしょう。喜びとはことの真偽をはかる大切な基準です。喜びのない深さは自己満足している深刻さです。喜びのない熱心さは報いを求める不平です。喜びのない正しさは他を裁く誇りに過ぎないのです。喜びのないものはすべて未熟であると考えて間違いないのです。

初代教会の働き、つまり福音とはこの喜びに満たされて集う人々の現実なのです。この世で「持つ」ことに喜びを見出す者が「先」であるとするならば、イエスの説く神の国では「持たない」けれどそこに喜びを見出す者が先になるのです。